

「続縄文」とは何か

鈴木 信(北海道埋蔵文化財センター)

I 続縄文研究の前提

1 はじめに

北海道の時代区分では、縄文式以降の縄文が付く土器のある時期を「続縄文時代」、縄文のつかない(≒刷毛目・ミガキが付く)土器のある時期を「擦文時代」とする。土器製作技法・組成の変化は細かい時間の推移を表す。だが、これが時代や文化変化の仕組みと 1:1 対応の因果関係である保証はなく、土器変化の仕組みは未解明でもある。土器型式も時代区分も新規属性によって区分されるものの、時代や文化は土器型式より高次の概念であり、時代は支配・秩序という政治的色彩が濃い用語であり、時代と文化は別種である。

時代名称はその期間における主体的文化負荷者名との整合を指向する。いっぽう、考古学は、遺物・遺構の集合を考古学的文化としてその負荷者を仮想するので、文化負荷者の不特定を許容する。そのため考古学における文化負荷者は匿名的である。

以上より、土器型式を時代区分に用いることは不適であるが、土器型式は「文化」に包含されることから物質文化名を代表することは許容される。よって、続縄文時代を使わず、「考古学による物質文化名+期」という命名法をとり、「続縄文期」を使う。

時間区分：山内清男の「続縄紋式」(山内ほか 1936)に円形・刺突文土器群Ⅸ～Ⅺ期を加えたものを「続縄文式」とし、「続縄文式期」「(型式名)式期・(土器群名)期」を使用する。文中において「○○式期・○○群期」の表記は「○○期」と略称することがある。そして、続縄文式期は、道南部・道央部・道東北部に固有の型式が並立する時期を「前葉」、三地域に顕著な属性交換がみられる時期を「中葉」、三地域に共通な型式がみられる時

表 I-1 時期区分と土器型式 鈴木 2009b 引用加筆

東北北部		道南	道央	道東・道北	西暦(C)			
弥生	前期	砂沢式	尾白内Ⅱ群	フシココタン 層式	前5c後葉～前4c前半			
	中期	二枚橋式	青苗B(古) 兜野式	H317式	興津式	前4c後半～前3c前半		
		宇鉄Ⅱ式	青苗B(新) 下添山式 (アヨロ1式)	H37栄町式(古)	(帯縄文を含む群)	(中ノ島第3群)	前3c後半～前2c前半	
			西桔梗B ₂	アヨロ2a式			H38栄町式(新)	前2c後半～前1c前半
			南川Ⅲ	アヨロ2b式			江別太1式	宇津内ⅡaⅠ式
	念仏間式	南川Ⅳ	江別太2式	宇津内ⅡaⅡ式	前1c後半			
	後期	家ノ前式	南川Ⅳ / 聖山KⅡ群	後北A式	下田ノ沢Ⅱ1式	宇津内ⅡbⅠ式	(1c前葉～1c中葉)	
	(鳥間)	聖山KⅡ群	後北B式	下田ノ沢Ⅱ2式	宇津内ⅡbⅡ式	(1c後葉～2c中葉)		
	古墳	赤穴式	後北C ₂ ・D式(古・中)			2c後葉～4c前葉		
		赤穴式/塩釜式	後北C ₂ ・D式(新) / 円形・刺突文土器群Ⅰ			4c中葉～後葉		
塩釜式		円形・刺突文土器群Ⅱ～Ⅲ			5c前葉			
南小泉式		円形・刺突文土器群Ⅳ～Ⅴ			5c中葉～後葉			
引田式		円形・刺突文土器群Ⅵ～Ⅷ			6c前葉～後葉			
住社式		円形・刺突文土器群Ⅸ～Ⅹ			7c前葉～中葉			
飛鳥	栗岡式	円形・刺突文土器群Ⅺ			7c後葉			

* 道東・道北は青森県(2005)・石川日出志(2006)・斎野裕彦(2011)、道東は熊木俊朗(2007)を、弥生～古墳初頭の西暦は若林邦彦(2018)を参考。続縄文前葉～中葉の暦年代と型式の並行関係はⅤ章を参照してください。

期を「後葉」に分ける。なお、時間軸として「続縄文時代」を用いないので細分名を「続縄文期〇〇葉」と略称した。

なお、後北 C₂・D 式のあとに続く型式名は所謂「北大式」が通有であるが、北大 I・II・III 式は型式として成立しないので、円形刺突文が付く後北 C₂・D 式と「円形刺突文土器」と「刺突文土器」を合わせて「円形・刺突文土器群」と呼び、後北 C₂・D 式を除いて I～XI 期に区分する。I～XI 期の明示が必要ない場合の総称は「北大式」を使用する。

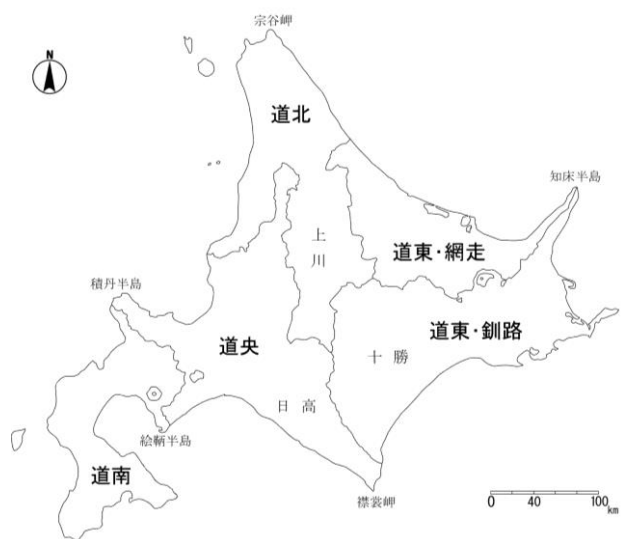


図 I-1 地域区分

空間区分：「北海道」は北海道本島と属島の総称で、「東北北部」は現在の青森・岩手・秋田県、「北日本」は東北 6 県と新潟県を指す。

北海道は千島列島を除き、渡島半島を主要部とする「道南」、石狩川中下流域を主要部とする「道央」、宗谷岬から石狩川上流域を主要部とする「道北」、日高山脈以東の太平洋側とオホーツク海側である「道東」に区分した。それらの下位区分には、「道南」が渡島・檜山・胆振西部・後志西部、「道央」が胆振東部・日高・石狩・空知・後志東部、「道東」は十勝と釧路・根室と網走、「道北」は宗谷・留萌と上川がある。

文化負荷の主体者：文献史料における民族名は形質的・風俗的・地理的差異に基づく過去の定義であり、自称・他称がある。例えば、東北北部以北の人々は「蝦夷」・「渡島蝦夷」と呼ばれたが自称ではない。文化人類学においては現時点の風俗的差異に基づく現時点での定義であり、自称が多い。考古学においては過去の物質文化の差異における現時点での定義である。形質人類学においては骨格形態・遺伝子的差異における現時点での定義であり、文化的帰属・主体者名に直接帰着しない。

自称の使用は是であるが、他称には検討が要されるものを含まれる。ただし、歴史用語として定着しているものもある。考古学資料の匿名性より行為の主体者も定まらない場合が殆どである。そこで本論においては、北海道の物質文化における主体者には「考古学による物質文化名＋人」：例えば「続縄文文化人」を使用する。

2 続縄文研究の視点

「続縄紋」は、山内清男が 1925 年刊の V.Childe の『The Dawn of European Civilization』にある考古学的文化区分名 Epi-Paleolithic を援用して作った用語で、Jomon に epi-を接頭した合成語であった(大沼 1977・1999)。なお佐原真によれば、1932～33 年に山内が北欧圏に倣ってこれを設定したようであるとのことである(佐原 1984)。時間の前後について「あと」を表す接頭辞には epi-と post-があり、epi-は接続を含意し、post-は断絶を含意する。epi-の選択は、山内が東北北部～北海道における「続縄紋」を縄文土器・縄文文化の後継と考えていた証左である。

「続縄紋式」という言葉の初出は 1936 年である(山内 1936)。その内容は「(前略)縄紋式の後にも、縄紋を持った土器型式が相当続いて居る。(中略)うちに二つ以上の細別を

認めうるようです」(山内ほか 1936)、である。伊東信雄は東北北部～北海道にある土器について、「縄文式」と了解しつつも「弥生式的なもの」と考えた(伊東 1950・1955)。

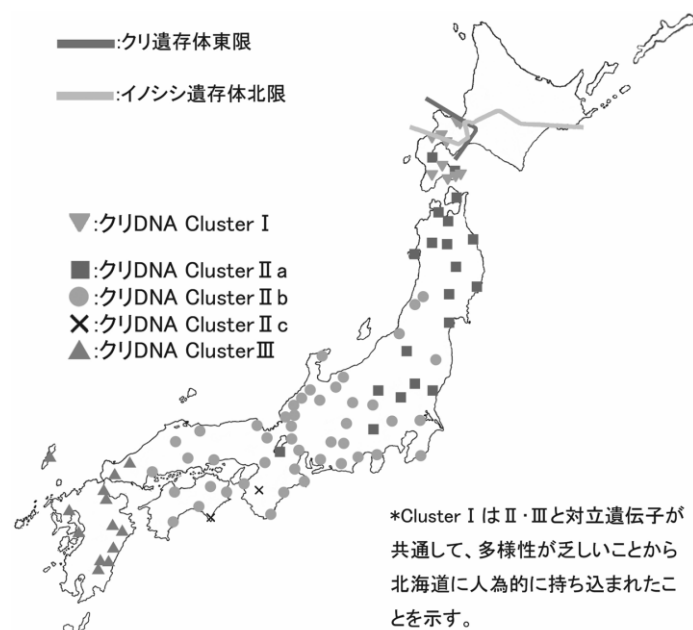
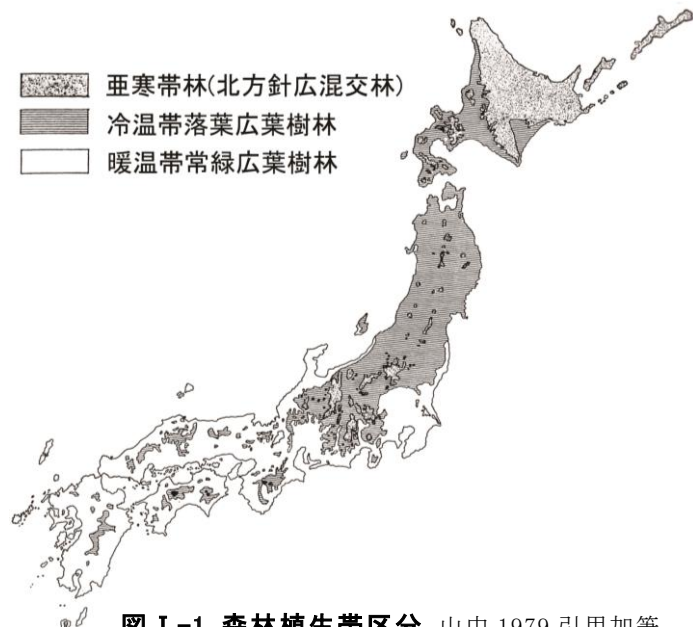
「縄文式文化」という言葉の初出は 1959 年『図解 考古学辞典』(水野・小林 1959)であるが、山内自身は「(前略)内地が弥生文化に変化する頃になると、全道は、わたくしが『縄文式文化』とよんだ(後略)」と述べ、1937 年当時には既に「縄文式文化」という用語を使っていたと語っている(山内 1969)。それは「現在の原始民族の経済階級のうちの高級狩猟民」(山内 1937)、「(前略)生活状態は、縄文式と同様、狩猟漁撈採集であった。」(山内 1964b)、後には「(前略)内地は稲が作られ農業が一般化しているのに、全道ではその痕跡がなく、高度の漁撈狩猟民としての生活がみられるのである。」とのべる(山内 1969)。

近年では、「縄文文化」という考え方は受け身な考え方である。(後略)」(藤本 1988)、「縄文文化の(筆者補)概念の空洞性・暫定性は今なお解消されていない。」(高瀬 2010)と言われる。縄文文化の一部・地域史であり、一時代史として扱われない現状の指摘である。その背景には山内の言説があり、それは V.Childe が唱えた伝播論に基づく欧州新石器の成立との比較から導かれていた。

「縄文」は、接頭辞の「縄」と語根の「文」の合成語であるから、それらの再確認が端緒であり以下で検討する。

北海道の「縄文」について: 北海道の「縄文」は、自然環境・食料生産において本州の「縄文」と相違がある。北海道全域で縄文文化の自然環境が整う時期が後氷期の温暖期(約 11,500～8,400calBP)以降であり、少なく見積もった場合でも本州に比べて 3,500～1,500 年遅れて縄文的环境が形成されたと考えられる。

石狩低地帯よりも南西側の渡島半島を中心とする地域ではトチノキ管理利用には遅滞はないものの、クリ栽培・イノシシ養育は遅れ出



現する。石狩低地帯ではクリ栽培・イノシシ養育はさらに遅れて出現する。日高山脈以東では、トチノキ管理利用・クリ栽培はなく、イノシシ養育は太平洋側の一部に石狩低地帯とほぼ同じところにみられる。いっぽうで海獣猟はほぼ全域で盛んである。

北海道の縄文文化は本州のそれとはまた異なって、生業において、本州の縄文要素の欠落があり、受容した場合にも遅滞がみられかつ少例となる。「続縄文」の語根となる「縄文」において、北海道のそれは本州の縄文と異質である。北海道の縄文文化は、石狩低地帯以西については「変則的縄文文化」、日高山脈以東については「逸脱的縄文文化」ということになる。

続縄文の「続-」について：続縄文の何が連続的なのか。資源利用・物資交換については以下と考える。「生業の特化：威信の漁撈→対価獲得猟」・「広域交換の生業基盤化：第二の道具(玉類)の交換→第一の道具(鉄器)の交換」、後葉以降の「道央の優位性」は地勢を利用した広域交換によりがもたらされた。くわえて縄文型の網羅的生業を維持

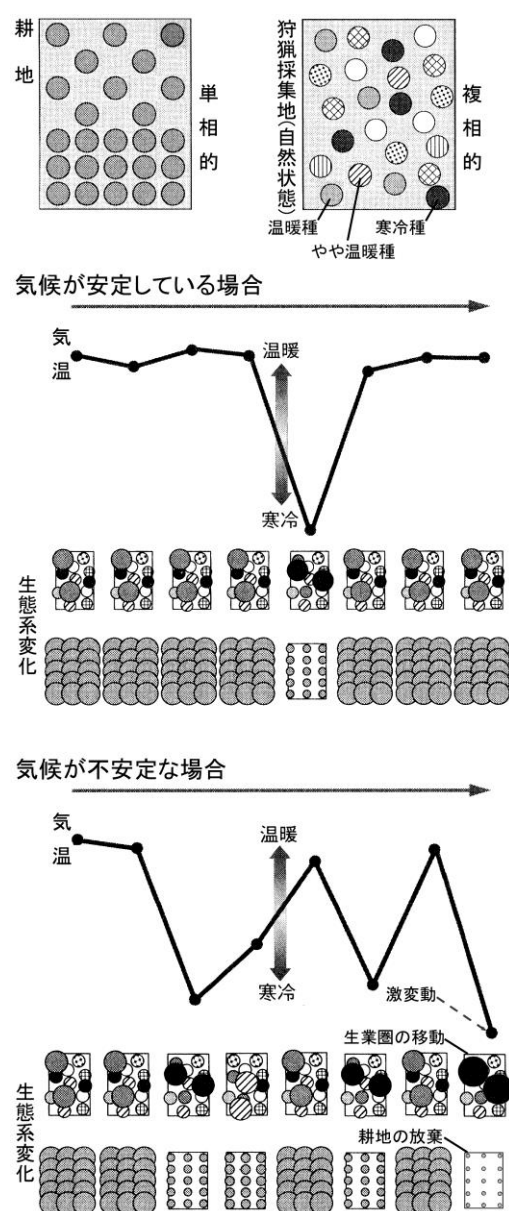


図 1-4 中川モデル 中川 2017 引用加筆

し漁撈・交易に特化した経済である(鈴木 2009a・2015)。いっぽう高瀬克範は、続縄文前～中葉に「資源構造の拡張的開発」がみられ、「道央の優位性」により続縄文期後葉に「高移動性集団による物資交換」がみられる、と考えた(高瀬 2014)。

生業変化が「生業の特化」あるいは「資源構造の拡張的開発」にあたるのか、「地勢」「資源構造の拡張的開発」により「道央の優位性」が生じたのか、検討が必要である。

加えられるべき視点：気候変動は生業にどのような影響を与えたのか。中川毅は、農地と自然状態の生態系を比較して前者が単相(≡人為的)・後者が複相(≡自然的)であることを示し、後氷期以後と晩氷期以前の環境がこれにあたることに言及している。その上で、農耕と狩猟採集は生態系変動から受ける影響に対して全くことなる応答を見せることを示した(中川 2017)。

気候安定の場合：農耕は高い食料生産性(少種多量)により余剰が発生し、人口増・社会構造の複雑化・食料備蓄の増が進む。これにより 1 回の異常気象は備蓄・食糧交換により危機回避が可能である。狩猟採集は農耕よりも低い生産性(多種少量)により少ない人口が維持される。1 回の異常気象では多様な資源を活用し危機回避できる。農耕・狩猟採集とも食料事情の逼迫はない。

気候不安定の場合 1：連続する異常気象において、農耕は備蓄が払底し食糧交換の原資もなくなり、危機回避は不可能である。狩猟採集は

多様な資源を活用し危機回避できる。農耕は危機的状況になるが狩猟採集はそうならない。

気候が不安定な場合 2：激変動がある場合に双方とも危機回避はできない。

人口が少なく生態系が複相である狩猟採集は気候変動に対する危機回避力が高く、人口の増加・社会の複雑化に至る農耕は気候変動に対する危機回避力が低い。自然環境変動は気候変動に由来し、植生・地形に依拠する生業にも関連する。

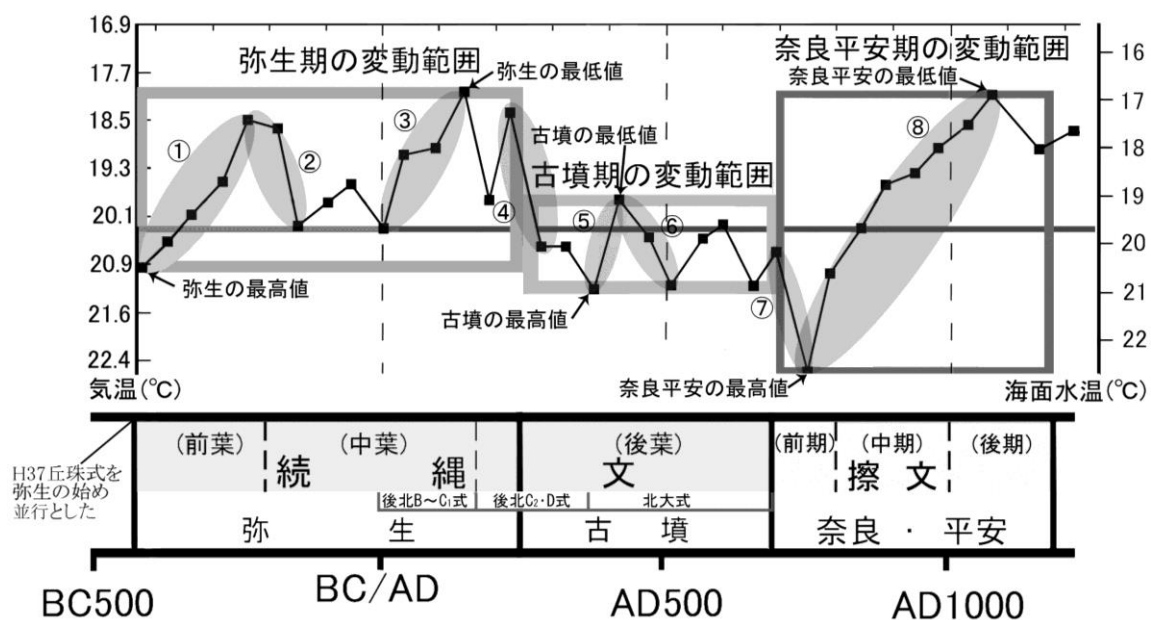
II 文化変容の背景

1 気候変動と自然環境変動

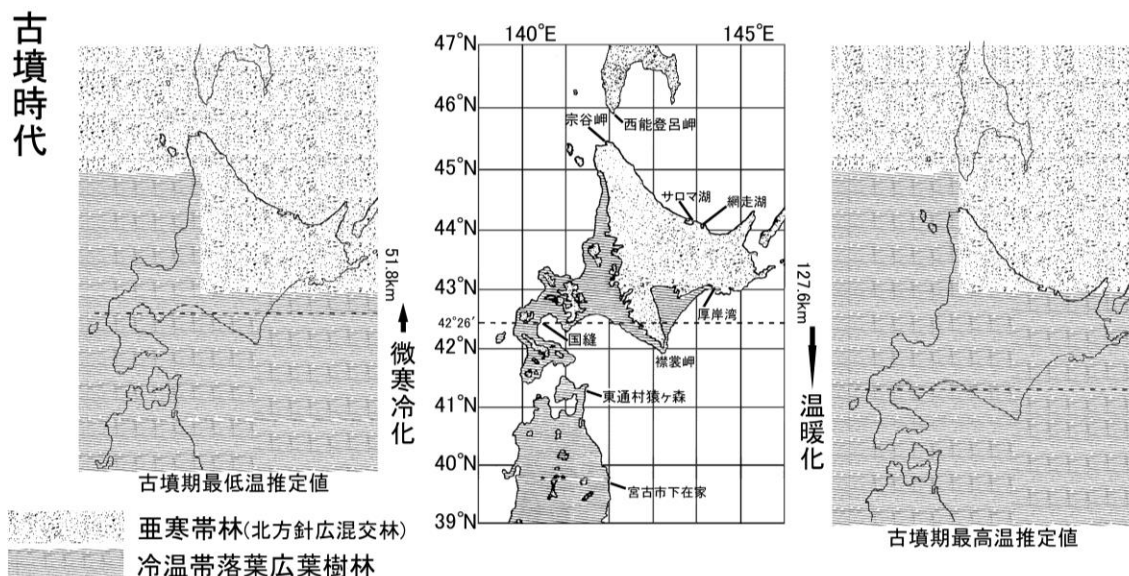
ある種の円石藻は有機化合物アルケノン生成する。アルケノン生成は円石藻の育成海水温により変化するので、その生成は海水温と高い正の相関がある。特に生息海域が内湾・近海の場合には夏季気温と海面水温とは高い相関がある(川幡 2016)。

図Ⅱ-1(内浦湾長万部町国縫沖採取サンプルの解析、東京大学大気海洋研究所 川幡穂高教授ご教示による)によると、弥生時代は、最高気温と最低気温の間に2回の下降(①・③)と2回の上昇(②・④)がある。古墳時代は、最低気温(⑤は最低気温の直前の寒冷化)のあとに90年間で最高気温とほぼ同じくらいになる急激な上昇(⑥)がある。奈良平安時代は、初頭にある温暖期(⑦)を差し引くと、249年間で -2.6°C となる寒冷傾向である($-1.04^{\circ}\text{C}/\text{hr}$)で、⑧は連続する寒冷であるがその中程に寒冷化が緩やかになる部分がある。変動が一定傾向的に継続していないことが読み取れる。

変動百年率については、森林帯の交替が起こった晩氷期～後氷期(変動百年率: $1.3\sim 1.4^{\circ}\text{C}/\text{hr}$ 、変動期間:26hr)と比較すると、⑧の最高気温→最低気温: $-1.52^{\circ}\text{C}/\text{hr}$ のみが $1.3\sim 1.4^{\circ}\text{C}/\text{hr}$ を下回る。いっぽう、変動期間は全てが26hrを下回る。続縄文期は後氷期の寒冷傾向(縄文中期以降)に後続する時期であるが、晩氷期～後氷期の変動に較べると変動幅は激しいものの変動期間が短い。単一傾向が続いている期間の長さが森林帯交替を起こす十分条件といえるので図Ⅱ-2のような状況は生じない。



図Ⅱ-1 アルケノン気温・海面水温 川幡 2018 引用加筆



図Ⅱ-2 気候変動による森林帯移動の仮想図

2 気候変動と文化の拡大縮小

木村 高によって後北 $C_2 \cdot D$ 式期(古墳時代併行期)における続縄文文化要素拡散の原因説がまとめられている(木村 2011)。原因説は以下の3件である。A説:気候の寒冷化、B説:樺太方面から南下した北方文化の影響、C説:鉄器など物資獲得のため。

北海道における気候変動の激変期は、弥生時代の②③、古墳時代の⑤⑥、奈良平安時代(擦文文化期)の⑦⑧、ほかに時代を挟んで縄文晩期～続縄文期前葉の急冷期①、続縄文期中葉～後葉の急激な回復期④がある。変動量の大小は、急冷期:⑧>③>①>⑤、急激な回復期:⑦>④>②>⑥の順である。

「続縄文の要素の拡散」といえる後北 $B \sim C_1$ 式期は急冷期③を含む。「続縄文文化の拡大」といえる後北 $C_2 \cdot D$ 式～円形・刺突文土器群 I～V 期は、急冷期⑤、急激な回復期④⑥を含む。「続縄文土器・墓制が北日本に分布する」時期は、急冷期③→急激な回復期④→急冷期⑤→急激な回復期⑥を含む。いっぽう、急冷期①→急激な回復期②期である H37 丘珠～H37 栄町式では東北北部の要素が北海道へ拡散するものの、北日本での「続縄文文化の拡大」「その要素の拡散」はみられない。気温の昇降③④の組合せ、⑤⑥の組合せ、と土器・墓制分布の拡大・収縮は相応せず、同じ気候変動のもとにある東北地方の墓制例数の増減は北海道のそれと連繋しない。A説はこれらを説明できない。

B説もA説では説明できない。北海道における鈴谷式の極少出土例、樺太・南千島における後北 $C_2 \cdot D$ 式(鈴谷式並行期)の極少出土例、北日本における後北 $C_2 \cdot D$ 式期の「続縄文文化の拡大」は急激な回復期④にあたるが、これら土器・墓制分布は、鈴谷式の南下、後北 $C_2 \cdot D$ 式(古・中)の北上、後北 $C_2 \cdot D$ 式期続縄文文化の南下であり、拡散方向・拡散量にばらつきがあり続く十和田式期には「オホーツク文化の拡大」と言えるほどで、遺跡・遺物の出土例が急増するものの、十和田式は急冷期⑤と急激な回復期⑥の両期に出土する。この状況は後述のC説により説明可能である。

A説が支持される背景には、気候変動の結果として生業変化・それに伴う人口増減を想定するからである。既述した「中川モデル」は、多様な自然環境とその変動に対する生業モデルと仮想実験であり、特に狩猟採集が環境変動に柔軟に応答する生業である

ことを示唆している。生業については次に言及するが、寒冷化・温暖化双方に生業の利点が生じており、旧石器時代→縄文時代を下回る続縄文式期の気候変動においては「中川モデル」を支持する結果となっている。

のころ C 説は気候変動とほぼ関わらない「鉄器など物資獲得のため」である。この説は交易品の種類・量の評価によって否定肯定される。交易によって入手する物資は鉄製品・碧玉管玉・ガラス玉など希少性を有するもので、希少性は北日本との交易によってのみ入手できることに由来する。

鉄製品は石器の変化からみると、円形・刺突文土器群 I～III 期は鉄器が実用財となる時期、その前後北 C₂・D 式期は鉄製品が象徴的財から実用財へ移り変わる過渡期である。そして、鉄利器組成の変化は後北 B 式期が画期で、石器組成の変化は円形・刺突文土器群 I～III 期が画期である(表 II-1 参照)。これらの獲得は鉄製品に始まった訳ではなく石製象徴的財を求めたことに始まる。聖山 K II 群・後北 C₁ 式期は石製象徴的財と金属象徴的財を必要とした時期であり、後北 C₂・D 式期は石製象徴的財と金属製象徴的～実用財を必要とした時期であり、円形・刺突文土器群 I～III 期は石製象徴的財と金属製実用財を必要とした時期である。「続縄文土器・墓制が北日本に分布する」は、単に鉄製品の需給で発生した現象ではなく、北海道側の受容変化:石製→金属製、象徴的財→象徴的～実用財→実用財と、北日本の石製・金属製品供給の変化の上に成立した現象である。

3 自然環境変動と生業

ヒトに内蔵されていた情報が再生されて遺物・遺構に具現する、その変化が文化変容である。その前段には、授け手-受け手(他者)を通じて、あるいは同一人(自身)の中でという社会的環境がまずあり、次いで人工物を具現させるための自然環境が必要となる。自然環境とは、人間が存在可能な時空間で、人間が先天的・後天的に獲得した手段を通じて精神的・肉体的糧を得るために消費する対象。社会的環境とは、信仰・生産・消費と分配(貯蔵)・階層など精神的・肉体的活動を行ううえで介在する関係である。

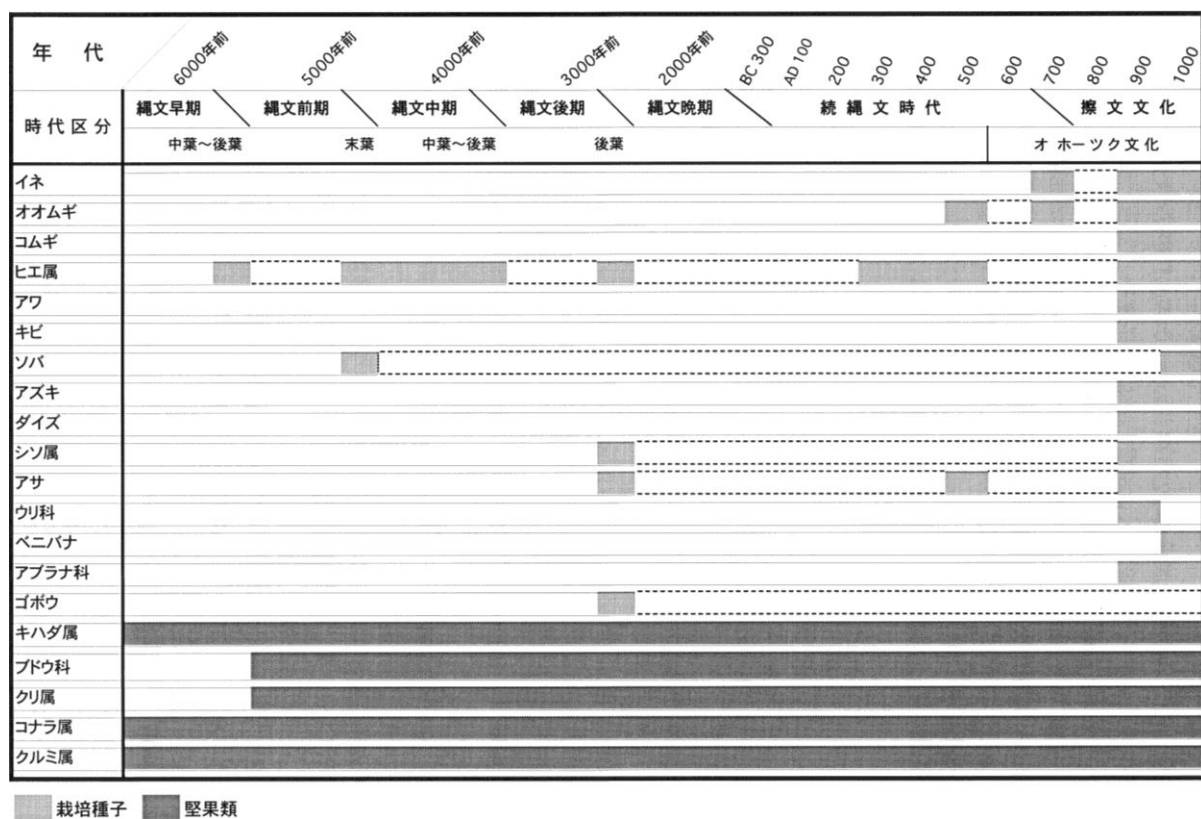
そして、地質相・植物相・動物相の一部である資源相に働きかける「採る・育てる・換える」が食料生産で、具体的には採集・狩猟・漁撈・農耕・交換などの行為である。資源は、環境条件により分布に種類・量の偏在があり、かつ季節的に増減がある。このことは、生業成果の変動が必然となるので交換も生業の重要要素である。

I 章-2 において続縄文の「-縄文」や「続-」を検討する際に「変則的縄文文化」・「逸脱的

表 II-1 石器・金属器の消長 鈴木 2003b 引用

時期(道央の土器型式で代表した)		石槍	石鏃	鉄鏃	魚突き鉤	ナイフ状石器	石鏃	挿器など	楔形石器	刀子	鉈	錐・針	石斧	板状鉄斧	袋状鉄斧	鉄鎌	鉄先	大刀・横刀	掘子	紡錘車	器種不明
続縄文・前葉	H37丘珠～H37栄町古	▲	▲			▲	▲	▲	▲				▲								●
続縄文・中葉	H37栄町新～後北B式	▲	▲	●		▲	▲	▲	▲	●			▲	● 鋳造							●
	後北C ₁ 式		▲	●		▲	▲	▲	▲	●			▲	●							●
続縄文・後葉	後北C ₂ ・D式		▲	●		▲	▲	▲	▲	●	●		▲	●							●
	円形刺突文土器群期 I～III			●				▲	▲	●	●			●	●						●
	円形刺突文土器群期 IV・V			●				▲	▲	●	●			●	●	●					●
	円形刺突文土器群期 VI～VII			●				▲	▲	●	●	●		●	●	●	●	●	●		●
続縄文・前期	円形刺突文土器群期 IX～XI			●				▲	▲	●	●	●		●	●	●	●	●	●		●
	8世紀代			●				▲	▲	●	●	●		●	●	●	●	●	●		●

●は鉄器、▲は石器。網掛けは存在が予想されることを示す。



図Ⅱ-4 浮遊選別資料にみる有用植物の消長 椿坂 2013 引用加筆

部・道北部では本州以南の影響がみられるが、後北 B 式期(弥生後期前葉並行、図Ⅱ-1の③の前半)以降にはなくなる。また、道南～道北の漁撈は銚頭・鮑漁に新規性があるものの、この技術は水稻耕作の要素ではない。くわえて東北地方以南から陸獣・植物対象の生業技術は入っていない。

漁撈具・動植物遺存体からみると「資源構造の拡張的開発」ではなく「生業の特化」であり、「epi-」の基本要素であることから次が言える。道東部の生業は「逸脱的縄文文化」の生業特化を経ていることから、「続縄文逸脱継続型」生業と呼べる。道南～道北の生業は、特化を伴う続縄文の生業に至るものの、「変則的縄文文化」の生業に戻るので「続縄文変則回帰型」生業と呼べる。そして「続縄文逸脱継続型」生業と「続縄文変則回帰型」生業は急冷期・回復期・温暖期にあっても複相性を維持している。

交換：物資交換の形態は三つある。第一は「遭遇型交易＝沈黙交易」。これは接触を回避するための交換方法で、そのため交換の機会是不定期である。文化の共有はなく、「もの」の交換に終始する表層的物資交換。第二は「域内交易」。これは“文化”の共有に基づいた交換で、「かかわり」と「もの」が強く結合する深層的物資交換である。この交換の基底には社会的距離が恒常的に縮んだ関係＝社会的距離を緊密にする必要のない関係(「ウチ」)があり、「かかわり」の結果として「もの」が動く。「域内交易」は儀礼的・贈与的交換が主目的である。自製・獲得容易な非現地性物資(域内交換財と呼ぶ)を求める。第三は「渡海交易」。これは“文化”が異なるあいだで行われる交換で、「かかわり」と「もの」に弱い結合(互いの背景・意図の秘匿も可能)がみられる中層的交換で、紛争・交換の断続も生じやすい。「もの」を恒常的に動かすために「かかわり」が必要となる。この交換の基底には、物理的距離を社会的距離に置換し、社会的関係を緊密にして物

理的距離の短縮を代替する(「ソト」の「ウチ」化)があり、移住によって社会的関係を緊密にする「定住型交易」、一時的に滞留することによって社会的関係をある程度隔てる「滞留型交易」がある。「渡海交易」は物質交換の交易が目的で、自製・獲得不可能な物資(広域交換財と呼ぶ)を求める。

この交易の維持には次の前提がある。生業維持の労働は二種類に大別され、ひとつは個人分散型(個人的技術の差で成果が変動する。成果は個人に還元)であり、狩猟と鮎による漁撈など仕留める方法の労働である。もうひとつは団体集約型(個人的技術差よりも技術の共有の規模で成果が変動する。成果は集団に帰属し集団内の個人に分配)であり、網による漁撈と採集と栽培がある。個人分散型は射倖性が高く、団体集約型は射倖性が低い。渡海交易の原資(広域交換財)を生む毛皮獲得猟は、「季節的広域移動：Ⅱ章-4 参照」・少量獲捕、個人分散型・高射倖性という不安定要因を内包するので、集団の安定が前提となる生業で、原資獲得を下支えする生業(多量獲捕、「射倖性低」という性質で、域内交換財・自家消費財を生む)と表裏の関係にある。そして、地域・季節による生業成果の偏在が社会関係の一種である域内交易によって調節され、集団の安定が生じ、毛皮猟が維持され、渡海交易は継続された(鈴木 2007a・2009a・2009b・2011)。

渡海交易の変遷：北海道と東北地方における渡海交易は、東北地方に現れる北海道系土器・墓制と鉄関連遺跡の分布の状況よりⅠ～Ⅶ段階に変遷する。そのうち、続縄文期の交易はⅠ～Ⅳ段階にあたる(鈴木 2003b・2007a)。

Ⅰ段階(弥生後期前半以前)：後北B式と後北系土坑墓が道東・網走、道南に広がるが、東北系土器がみられず、恵山式のなかに二枚橋～田舎館 2・3 式の表出的・中間的属性の影響が確認できる(設楽 2003、高瀬 1998)。いっぽう、東北地方では、南川Ⅳ・後北B式とその表出的属性が転移した土器が津軽半島北半・陸奥湾周囲・下北半島・小川原湖周辺に極少数出土し(青森県埋蔵文化財調査センター木村 高氏のご教示による)、日本海側では宇津ノ台式が佐渡島・新潟県沿岸まで南西へ分布を拡げる(相沢 2002)。また、弥生時代後期前半の富山県高岡市下老子笹川遺跡からは帯縄文が付く天王山式が出土する。なお、北海道系墓制は認められない。

東北・北陸地方において極少数の北海道系土器が沿岸部に出土するが、北海道系墓制がないので北海道続縄文文化人は本格化的に定住していない。日本海沿岸では後北A・恵山 ↔ 念仏間 ↔ 宇津ノ台 ↔ 小松式など、太平洋側では恵山 ↔ 田舎館 2・3 ↔ 龍門寺と各型式が接続して分布する。以上より、その交易は、原産地(=翡翠・碧玉製管玉などの採掘・加工)から日本海沿岸(島嶼部を含む)を滞留しながら中継ぎ式に運ばれる方法で、中継点は各型式分布の周縁域に散在すると考えられる。Ⅰ段階は中継ぎ式の滞留型交易を行っている時期。

北海道からの移出財は石斧石材で(鈴木 2008)、道央日高の額平川流域に産する(合地ほか 2005)。この石材は弥生中期初頭の石川県小松市八日市地方遺跡が最西例で、弥生前～中期に青森県・秋田県北部に多く例がある(佐藤 2016、佐藤ほか 2018)。移入財(翡翠・幼猪、碧玉管玉・南海産貝装飾品)は象徴的財で縄文時代以来の種類である。

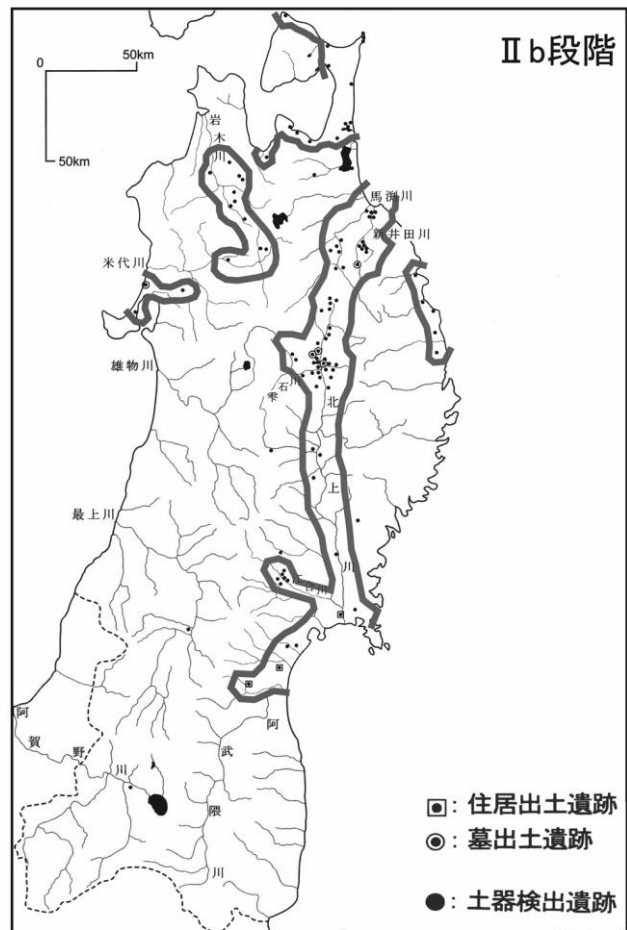
Ⅱa 段階(弥生後期後半)：天王山系土器が道央以西で認められ始め、福井県東部沿岸ー関東北部まで分布を拡げる(相沢 2002)。そして、北海道系土器(聖山 KⅡ群・後北 C₁ 式)と天王山系が混在して新潟県まで拡散するので、それぞれが直接に北陸弥生土器圏

(猫橋～月影式)と接触するようになり、滞留型交易から定住型交易への移行期となり中継方式はとられなくなったと推定される。ただし、この段階でも前段階の日本海側経路が踏襲されており、金属器・ガラス小玉は翡翠・碧玉管玉の流通経路に乗って移入されると考えられる。日本海側に偏り少数の北海道系土器が分布するものの、北海道系墓制がないので北海道続縄文文化人の定住が本格化している可能性は低い。

北海道からの移出財は、東北では弥生後期末赤穴式期に農工具が鉄器化するので、石斧石材はまだその可能性がある。直接的な証拠はないものの、漁撈体系の変化(魚形石器の消滅・銚頭の変化)から陸獣・海獣毛皮が考えられる。北海道における移入財にはガラス小玉・金属器がある。ただし、鉄器の出土量は極めて少なく、石器組成に変化がないので鉄器は実用財と言い難い。移入財は実用財の機能を有する象徴的財(「第二の道具」)であり、移出財は象徴的財に変わる。この組合せはⅡb段階へと引継がれる。

Ⅱb段階(弥生後期末～古墳前期中葉)：東北地方では後北C₂・D式とその模倣が、日本海側は新潟県まで、新たに太平洋側に経路状分布を示して宮城県にも拡散する。出土が集中するのは馬淵川・新井田川下流、新井田川上流、雫石川・中津川・北上川の合流点、江合川上流の大崎平野北部(図Ⅱ-5)。また、東北地方においてⅡb段階以降に方割礫・黒曜石製石器が少数出土し始める。それらは製作・使用する人々の移住を示すと考えられる。北海道では後北C₂・D式と後北系墓制が北海道全域にひろがり、極少量の赤穴式が道央以西に分布する。東北地方における北海道系墓制は極少数ではあるが、岩手県(4遺跡)・秋田県(1遺跡)にみられる。北海道と比較すると、東北は楕円形である(北海道は円形)、袋状土坑が長軸上である(北海道は長軸右)、袋状土坑の位置は様々(北海道は坑底と壁面の境がやや多い)、柱穴様土坑は「長軸両端2本」(北海道も同じ程度ある)である。

東北地方において、北海道系土器が経路状に分布し、北海道系墓制(内在的属性においては若干の変異があるが、表出的属性・中間的属性は共通する)が出現するので、少数の北海道続縄文人が物資の結節点(北海道系土器の集中点:約50km間隔)を結んだ経路に移住し、恒常的定住型交換を開始した。この段階は直結的關係がより強化された。鉄器は実用財の機能が増し、当該期以降、鋼・鉄器・金属製品獲得の交易が他の生業活動の基盤となる。Ⅱb段階は定住型交易の開始期。



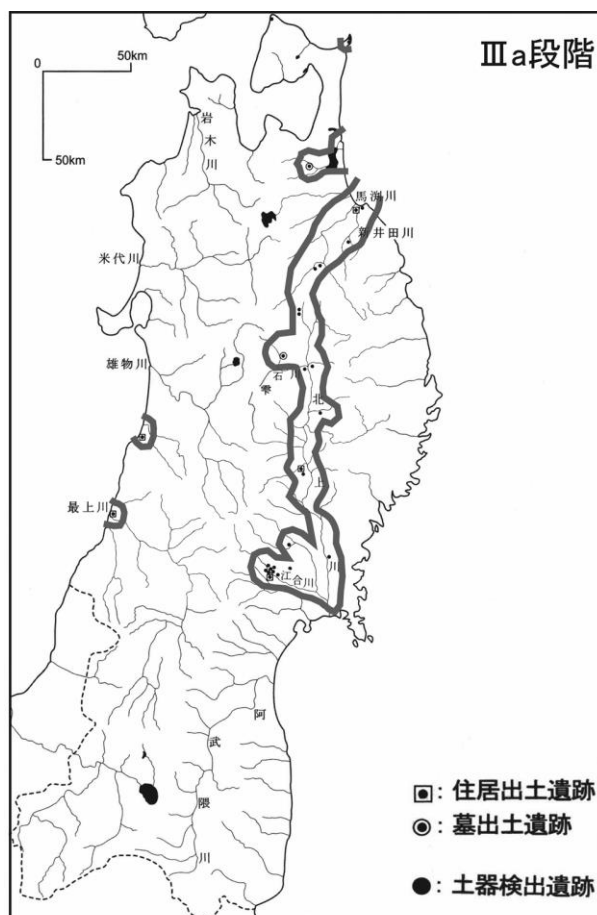
図Ⅱ-5 後北C₂・D式の分布 鈴木 2003b 引用加筆

北海道からの移出財は前代から引き続き陸獣毛皮・海獣毛皮が考えられる。移入財はガラス小玉(全道に分布し、当該期に急増)と刀子・鉋・板状鉄斧(出土例は増えて鉄器・石器組成に変化が見られ、実用財としての用途が増す)がある。

Ⅲ段階(古墳前期後葉～飛鳥時代前半)：東北地方では円形・刺突文土器が日本海側は山形県まで、太平洋側は経路状分布を示し宮城県まで分布する。分布はⅢa段階ではⅡb段階に較べ僅かに北退し、Ⅲb段階にはそれが顕著になる。出土が集中するのは馬淵川・新井田川下流、馬淵川・安比川の合流点、雫石川・中津川・北上川の合流点、胆沢川・北上川の合流点、江合川上流の大崎平野北部で前段階よりやや分散する(図Ⅱ-6・7)。

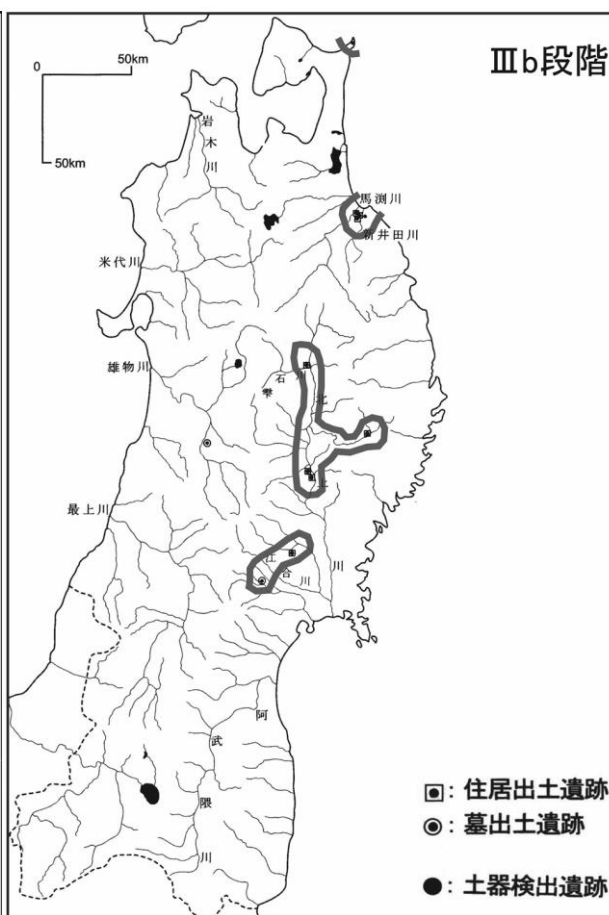
東北地方の北海道系墓制は極少数青森県(2 遺跡)・岩手県(2 遺跡)・秋田県(1 遺跡)・宮城県(1 遺跡)にみられる。円形・刺突文土器群Ⅰ～Ⅴ期においての北海道墓制と比較すると、東北は楕円形が多い(北海道は円形)、袋状土坑が長軸右である(北海道も同じ)、袋状土坑の位置は壁面が多い(北海道も同じ)、柱穴様土坑「長軸両端2本」である(北海道は事例を欠く)。円形・刺突文土器群Ⅵ～Ⅷ期の北海道墓制と比較すると、東北は隅丸方形が多い(北海道は円形と隅丸方形ほぼ同数)、袋状土坑が長軸右(北海道は長軸上)、袋状土坑の位置は壁面が多い(北海道も同じ)、「四隅突出」墓坑がある(北海道も同じ)、長方形木棺に袋状土坑が備わる(北海道にない)。

東北地方では北海道系土器の経路状分布に短縮・寸断があり、北海道系墓制には在地墓制との融合がある。円形・刺突文土器群Ⅰ～Ⅴの分布(約50km間隔)は維持される。



図Ⅱ-6 Ⅰ～Ⅴ期円形・刺突文土器の分布

鈴木 2003 引用加筆



図Ⅱ-7 Ⅵ～Ⅷ期円形・刺突文土器の分布

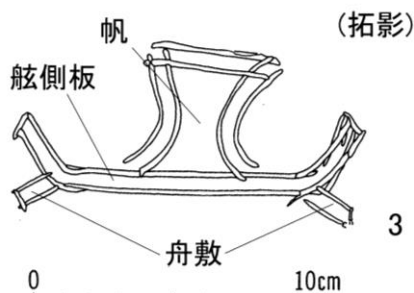
鈴木 2003 引用加筆

春夏季の季節的漁撈、それらを行うための移動。「季節的広域移動」とは、熊猟など交易の対価獲得猟のために行う冬季の季節的猟を行うための移動、狭域の広域交換財(琥珀・黒曜石・頁岩)と広域の域内交換財(動植物食料)を交換するための移動。「季節的超広域移動」とは、漁撈・狩猟を行う範囲を大きく超えるもので、渡海交易にあたり、広域交換財(幼猪・碧玉管玉・ガラス小玉・金属製品)を交換するための移動(鈴木 2015)。

“文化”のひろがり：文化を階層的に区分し、それに空間という属性を付したのは英国プロセス考古学者の David.Clarke が端緒である(Clarke.D1968)。少々古典的となるが次のように提唱した。文化(一定の地理的範囲内において、恒常的に反復される特定の・包括的な人工物型式の複相的な組成群)の推定半径 32～322 km、文化群の推定半径 322～1208 km、技術複合体(文化群の集合で、環境・経済・技術における共通した要素が広く拡散しながら、相互に関連するものとして共有される)の推定半径 1208～4830 km。

遺物遺構の変容は、続縄文前～中葉では道南・道央・道東釧路・道東網走・道北の各地域=面積からの換算半径 59～81 km＝“文化”の小規模で起こる。それが続縄文期後葉では、北海道全域=面積からの換算半径 158 kmは＝“文化”の中規模、北海道～新潟県西部県境(北海道全域 600 km＋北海道白神岬～新潟県西部県境海岸まで直線で 538 km)の範囲=この範囲は円に換算することが妥当ではないが、“技術複合体”の直径相当を往復しているとみなせる≡“文化群”の最大値～“技術複合体”の最少値。続縄文文化における属性変容の規模は、時期によって各地域→北海道全域～北海道～新潟県西部県境に当てはまる空間的広がりがある。続縄文文化は“文化”の小規模～“技術複合体”の最少値を持つので、最上位の文化区分(縄文・弥生文化と同位)に匹敵する必要条件を持っている。

そして、「道央の優位性」は「資源構造の拡張的開発」によって生じたのではなく地勢の利用によって生じた。道央低地帯は日本海と太平洋に接し、それらは標高 25m 前後の低平な台地(台地最狭部は 0.9km しかない)により分けられ、そこには長大な河川が流れ、内水路の選択肢が多い。外洋航海用の準構造船はその大半を通行可能であることがアイヌ文化期の事例から推定できる。



図Ⅱ-9 土器に描かれた準構造船(円形・刺突文土器群Ⅷ期)

鈴木 2013 引用加筆

D.Clarke の考古学的文化区分には自然遺物に関わる内容が含まれていないため、それを生業の領域に直接当てはめることはできない。そこで生業の領域の内容と D.Clarke の区分に一致点が認められるかみてみる。

“文化”と「季節的狭域移動」「季節的広域移動」領域の内容の一致点は、続縄文期中葉の道南～道央部における複数漁撈具の変化であろう。“文化群”～“技術複合体”と「季節的超広域移動」領域の内容の一致点は、異なる自然環境にまたがる広域交換の仕組みと準構造船を用いる水上運輸の体系がそれにあたると考えられる。以上の根拠と大きさと合わせて、「季節的狭域移動」領域は“文化”の最小値～それ以下、「季節的広域移動」領域は“文化”の小規模、「季節的超広域移動」領域は“文化群”の最大値～“技術複合体”の

- 木村 高 2011「東北地方の縄文文化」『日本の考古学講座 7 古墳時代〈上〉』青木書店
- 熊木俊朗 2007「道東と道央部以南との比較」『科学研究費補助金基盤研究(B)(2)北海道における古代から近世の遺跡の暦年代』研究代表者 臼杵勲
- 合地信夫ほか 2005「縄文～縄文時代における北海道中央部から東北地方への緑色・青色片岩製磨製石斧の流通」『日本考古学協会第 72 回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 佐藤由紀男 2016「磨製石斧の流通からみた紀元前千年期の北海道・東北部」『北方島文化研究』12 北方島文化研究会
- 佐藤由紀男、宮田明 2018「石川県小松市八日市地方遺跡出土の層灰岩性片刃石斧と三面石斧をめぐって」『考古学研究』259 考古学研究会
- 佐原 真 1984「山内清男論」『縄文文化の研究』10 雄山閣
- 鈴木 信 2003「縄文～擦文文化期の渡海交易の品目について」『北海道考古学』39 北海道考古学会
- 鈴木 信 2007a「アイヌ文化の成立過程」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館
- 鈴木 信 2007b「仔熊飼育型熊送りの成立とその背景」『考古学に学ぶ(Ⅲ)』同志社大学考古学研究室
- 鈴木 信 2008「縄文文化の鉄器・石器・渡海交易の関係について」『シンポジウム 縄文文化とは何か』北海道考古学会
- 鈴木 信 2009a「縄文文化と弥生文化」『弥生時代の考古学』1 同成社
- 鈴木 信 2009b「縄文文化における物質文化転移の構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』185 国立歴史民俗博物館
- 鈴木 信 2011「擦文文化と交易」『古代中世の蝦夷世界』高志書院
- 鈴木 信 2013「北海道における事例」『舟と水上交通』石川県埋蔵文化財センター
- 鈴木 信 2015「縄文文化における生業と行動様式」『森浩一先生に学ぶ』同志社大学考古学研究室
- 鈴木三男 2016『クリと縄文人』同成社
- 高瀬克範 2010「縄文文化と縄文文化」『縄文時代の考古学』1 同成社
- 高瀬克範 2014「縄文文化の資源・土地利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』185 国立歴史民俗博物館
- 高橋 哲 2005「縄文文化後半期の石器研究」『北海道考古学』41 北海道考古学会
- 高橋 理 1991「縄文時代の貝塚」『考古学ジャーナル』336 ニューサイエンス社
- 椿坂恭代 2013「フローテーション作業を通してわかってきたこと」『先史時代の植物利用戦略』北海道考古学会
- 富山県文化振興財団 2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』同財団
- 中川 毅 2017『人類と気候の 10 万年史』講談社
- 藤本 強 1988『もう二つの日本文化』東京大学出版会
- 水野清一、小林行雄 1959「縄文式文化」『図解 考古学辞典』東京創元社
- 山内清男 1936「考古学の正道」『ミネルヴァ』1-6 ミネルヴァ書房
- 山内清男ほか 1936「北海道・千島・樺太の古代文化を検討する」『ミネルヴァ』1-7 ミネルヴァ書房
- 山内清男 1937「日本に於ける農業の起源」『歴史公論』6-1 雄山閣
- 山内清男 1969「縄文文化の社会」『日本と世界の歴史』1 学習研究社
- 山中二男 1979「日本の森林帯」『日本の森林植生』築地書館
- 若林邦彦 2018「近畿地方弥生時代諸土器様式の暦年代」『実証の考古学』同志社大学考古学研究室
- Clarke.David 1978 Analytical Archaeology second edition. London:Metheun